

# 滋賀県立琵琶湖博物館協議会 令和元年度第1回会議次第

日 時 令和元年（2019年）10月11日（金）

13時10分～15時10分

場 所 琵琶湖博物館1階セミナー室

## 1 開 会

## 2 議 題

- (1) 令和元年度の博物館活動について
- (2) 新琵琶湖博物館創造基本計画行動計画  
令和元年度取組状況について
- (3) 第3期リニューアルについて
- (4) その他

### 〈配布資料一覧〉

- 資料1 令和元年度の博物館の状況について
- 資料2 琵琶湖博物館創造基本計画にかかる行動計画令和元年度上半期取組状況
- 資料3 琵琶湖博物館第3期リニューアルについて
- 資料4 平成30年度第2回会議結果について

[13時10分 開会]

## 1 開 会

○司会（副館長）：それでは、定刻になりましたので、ただいまから滋賀県立琵琶湖博物館協議会、令和元年度第1回会議を開催させていただきます。

開会にあたりまして、館長の高橋がご挨拶申し上げます。

館長：皆さん、こんにちは。

ご多忙の中、お集りいただきましてありがとうございます。

私、先ほどご挨拶させていただきましたけれども、今年4月から館長ということになりました。どうぞよろしく願いいたします。

私、3代目ということなんですけど、3代目というと、やくざみたいな感じですけど、初代が川那部浩哉さん、2代目が篠原徹さんということで、外からお招きした立派な方々だったんですけど、私の場合には準備段階の最初からおりまして、もう30年ぐらいつと博物館とともに育ち、今、博物館とともに老朽化していくというような状態でございます。

館長は代わりましたけれども、琵琶湖博物館の基本理念は変わりませんし、地域の方々と一緒にいろいろなことをやっていきながら、また地域の方々に使っていただけるような博物館にしたいというふうに思っておりますので、この協議会でもぜひ皆様、いろいろご意見をいただければというふうに思っております。

今日は特に、基本計画行動計画、それから第3期リニューアルについて、いろいろご協議いただくことになっておりますので、よろしく願いいたします。どうもありがとうございます。

○司会（副館長）：当協議会の定足数でございますが、委員の半数以上ということになっておりまして、本日は委員全部で15名の方々のうち、今、12名ということで、もう一人お越しになって、13名、ご出席いただけることになっておりますので、滋賀県立琵琶湖博物館の設置及び管理に関する条例第9条第2項の規定によりまして、会議が成立しておりますことを、ここにご報告させていただきます。

それでは、早速でございますけど、議事のほうに入らせていただきます。

以降の議事進行につきましては、これまた滋賀県立琵琶湖博物館の設置及び管理に関する条例第9条第3項の規定によりまして、会長が議長になるということになっておりますので、山西会長様、どうぞよろしく願いいたします。

○会長：皆様、どうもご苦労さまです。

今日は2時間の会議ということで、時間が限られています。13人の出席で2時間ということで、どういうふうに進めたらいいのかなど、余りにも時間が短くて、理不尽に感じる点もあるんですけども、皆様、それぞれ言いたいことを用意しておられると思いますので、余り特定のテーマに絞り込んでのディスカッションはできないとは思いますが、どうぞそれぞれご意見をおっしゃっていただきたいというふうに思います。

## 2 議 題

### (1) 令和元年度の博物館活動について

○会長：それでは、報告のほうですけども、議題（1）の令和元年度の博物館活動について、事務局のほうから説明をお願いします。

○事務局：企画調整課の芳賀です。よろしくお願いいたします。

今年の博物館の上半期の運営状況について説明いたします。

まず来館者数ですが、4月～9月まで、約30万7,000人で、昨年比べて3万3,000人多くなっております。

このおかげをもちまして、累計来館者数が今年の9月27日に1,100万人に到達いたしました。前回は2017年でしたので、2年間で100万人という形になっております。今回、1,100万人になられた方は、大阪から来られた方でした。

次に、主な行事・活動ですけども、展示につきましては、まずギャラリー展示としまして、春休みから5月の連休にかけて、国登録有形民俗文化財「琵琶湖の漁撈用具及び船大工道具」のギャラリー展を行いました。これは行動計画でお約束していたものになります。

続きまして企業のCSR活動を紹介するCSRパネル展を行っております。

現在、企画展示室と、それから水族企画展示室でピワマスをテーマにした企画展を行っております。こちらについては、後ほど、終了後にご案内させていただきます。

トピック展・常設展の更新等ですが、A展示室、「2億5千万年前の近江・美濃の化石」に続いて、今、「鉱物・化石のよもやま話」という形でやっておりますが、化石とか岩石とかを置いている奥のコレクションギャラリーのところ、全面的に地域の方々のコレクションの展示というふうになっております。これは来年の3期リニューアルで新しくなる展示室の予告も兼ねておりまして、今後も一緒にやっていくということのアピールにもなっております。

それから、B展示室、蔵ケースの中、いろいろ出しておりますけれども、今やっておりますのが、「江戸時代の風景－琵琶湖真景図をよむ」というものですが、これは江戸時

代の琵琶湖のかなり写実的な絵になっておりますけれども、実はよく見ると、はげ山だらけだと。昔は里山は自然が豊かだったって、本当はうそじゃないのみたいなどころがありまして、実はこれもB展示の新しい展示のほのかな予告を兼ねているということになります。

C展示、それからディスカバリールームのほうは、そちらに書いてあるとおりです。

水族展示のほうでは、1つ、トピックとして、「ナガレカマツカ」という新種が今年出たんですけども、それについての展示もしました。

それから、移動博物館。例年行っております博物館夏祭りに行ったほか、今年は琵琶湖汽船さんとコラボレーション企画という形で、ミシガンの上で展示をやるというのをやりました。その写真にありますように、ふだん、めったに出てこないんですけども、2.7メートルの巨大ナマズの模型とか、それからこちらか提供したいろんな魚の材料で、琵琶湖にはこんな魚がいるんだよという展示を船上で行ったということです。

相互プレゼント企画もそんなに多くはないですが、相互に60組ぐらいが訪れまして、ミシガンに乗ったから博物館に来た、あるいは博物館に来たからミシガンに乗ったというのがあったということです。

それから、イベントとしましては、ナイトミュージアムを7月27日に開催いたしました。中身はそこに書いてありますとおりで、当日の来館者数は5,714人、17時以降は2,600人でした。

来館者アンケートの結果は、「満足」というのが多かったです。

内訳を見ますと、「博物館に来たのは4回目以上」が72%ということで、地元の方が来られたという傾向がありました。

中身については、評価はよかったわけなんですけども、実はこのナイトミュージアムは、今まで来たことがない人を呼びたいなという側面がありまして、そちらの方面ではちょっとあてが外れたなど。ただ、知っている人がいつもと違うのが見れたという形で楽しんでいただけたということです。

それから、現在、A展示室とB展示室、これが11月24日までで一旦閉めますので、クロージングイベントというのをやっております。

お手元の資料に、A展示室とB展示室の秘密マップというのを作りまして、これで堪能してくださいということで、これは全員に配るという形でやっております。

前回の学校教材のワークシートのところ、配ったらどうかなというお話があったんですけども、学校教材のほうではやっていないのですけれども、今回は実際に配ってみたらどうなるかなというところで配るとい、その実験も兼ねているということにな

ります。

あとは見ていただいていたとおりで、交流活動はそのような数になっています。学校の訪問も昨年並み、環境学習センターの活動状況も昨年並み、資料の整理点数も昨年並みというふうに進んでおります。

1 ページめぐりまして、研究のほうに入りますが、「ビワコオオナマズの秘密を探る」というブックレットが出ております。

海外機関との連携ということで、今年の5月に、例年、交代でやっております韓国洛東江生物資源館との合同セミナーを、今回は向こうで開催してまいりました。共同研究でテナガエビの共同研究をやりまして、それが向こうのほうの主たる研究者で、学会発表が行われたんですが、これがポスター賞をいただいたと報告を受けております。

それから、国際交流として、今年は京都で ICOM 京都大会というのが9月1日から7日まで開かれました。これは世界の博物館の協議会ということなんですけれども、こちらのほうに、口頭発表3人、ポスター発表4人、その他大会参加等をしております。今日、お配りした資料の中に、そのときの様子が写真で出ております。今日、お配りした資料の1枚めくったところです。本会場がこんな感じでしたというのと、ミュージアム・フェア——物産市なんですけども、ほかの博物館もこういう形で出展しておりました。当館のほうは、関西広域連合のブースで、パンフレットとかを、当館の資料と県博協の資料を配るということを行いました。

裏面がオフサイトミーティングといって、大阪自然史博物館を会場にして行ったものです。当館からもポスター発表しております。

今回の ICOM については、テーマの一つが、「自然と文化の接点としての博物館」というのがありまして、博物館というのが今までの見る場所から、参加する場所であるというふうに、全体の主張として出ておりました。当館がずっとやってきたことなんですけれども、それと世界の流れが同調しつつあるなという印象を受けております。

そのほか、エクスカージョンを実施いたしまして、針江生水の郷と竹生島と琵琶湖博物館を回っております。

それから、自然史レガシー継承事業ということで、京都の町家を借りまして、ほかの幾つかの博物館と合同で展示をするというのをしております。

最後に今後の主な行事予定ですけれども、10月19日・20日、来週がびわ博フェスになります。

11月16日・17日、関西文化の日に参加しております。

琵琶湖地域の水田生物研究会が12月15日にあります。これは例年、200人以上参加し

ている、どんどん大きくなっている大会ですけれども、これが行われます。

それから、新琵琶湖学セミナーは、「湖の400万年と私たち・かわる大地・気候・生き物」ということで、これはリニューアルの予告ということになります。

それから、11月24日で一旦、A展示室とB展示室を閉めて工事に入ります。これが7月上旬まで続きます。その間、入館料が変更になりまして、大人については500円、高校生・大学生については300円、団体料金のほうもそれに合わせてスライドという形で変更が行われます。

最後、広報・営業活動ですけれども、ご支援とかにつきましては、そこにありますとおり、寄附金が136社、9,772万円というのは、全体の累計となっております。

事務局からの報告は以上です。

○会長：今年度の事業につきまして、中間報告をざっとしていただきました。

何かご意見、ご質問ございましたら、お願いします。

## (2) 新琵琶湖博物館創造基本計画行動計画

### 令和元年度取組状況について

○会長：そしたら、出にくいようですので、次の基本計画の説明もあわせて、先にお願ひできますでしょうか。

○事務局：わかりました。

それでは、「新琵琶湖博物館創造基本計画にかかる行動計画」の今年度の中間報告ということで、お話しをさせていただきます。

項目が非常に多くなりますのと、事前にお渡ししていますので、お目はお通しいただいていると思いますので、こちらから要点になるかなというところについて、幾つか紹介させていただきます。

まず、1番目の「常設展示の再構築」につきましては、後でリニューアルの報告もありますので、省略させていただきます。

2番目の「交流空間・交流機能の再構築」というところです。

一番上のおとなも楽しめる仕掛け・プログラムの充実というところで、おとなのディスカバリーの中にオープンラボというのを設けておりますけれども、これの利用が順調に進んでおりまして、60件利用されているという状況です。また、びわ博フェスでも、会場の一つとして使うということになっております。

樹冠トレイルを生かした交流ですけれども、これにつきましては、資料の行動計画の表の後ろにつけさせていただいていますが、樹冠トレイルについては、「森人（もりひ

と)」というはしかけのグループがありまして、ここが展示の案内をつくったり、ガイドブックをつくって、これはショップで売られております。なかなか好評で売れているようです。

そのほか、樹冠トレイルを使って、観察会等を行っております。この辺のどういう活動をしているかということを紹介させていただいております。

やっていますのは、樹冠トレイルで森のガイドということで、時間を決めてガイドツアーをやるというのをやっているわけですが、その準備とかを兼ねまして、いろんな森のメンテナンスをしたり、それから自主的に観察会とかに行つて勉強をしたりということをやっております。

写真に「植物をスケッチしよう！」というのが出ておりますけれども、これは樹冠トレイルのガイドではなくて、おとなのディスカバリーの植物のコーナーを使いまして、植物スケッチの教室を開催したということです。こういう形で、はしかけの方たちが活躍して、いろいろ展示交流というのを進めているというところになります。

表のほうに戻ります。

先ほどのところから2つ下になるんですけども、はしかけのグループを増やしていきますということをお話をさせていただいております。現在、26グループになりまして、ほぼほぼこれで上限、飽和状態かなという状態になりましたので、数をふやすというところについては、このぐらいまでにしておいて、令和2年度については、今度ははしかけの制度そのものを若干見直していこうかなと、性格を変えていこうかなというところで取り組んでいこうというふうに考えております。

3番の「利用者の利便性・快適性を高める施設整備」のところは飛ばしていきます。

4番の「多様な主体との連携」というところで、上から2番目に学校との連携というのがあります。この中で具体的な方策として、地域を研究する中学生・高校生の交流会というのが挙げられております。これにつきましては、今年のところを見ていただくと、「はしかけ梁山泊」という怪しい名前が登場しております。大体、梁山泊という名前をつける時点で、担当者の趣味が出てきているんですけども、これにつきましては、学校連携とはしかけ制度とちょっとハイブリッドのような形で、新しい動きになっていると思いますので、興味を持っていただけるかなと思います。後ほど担当の大塚のほうからプレゼン、説明をさせていただきたいと思います。

次の5番、「広報・営業活動の強化」のところは特にトピック的なものではなくて、それなりに進んでおりますという状況です。

最後のページの6番、「資料を利用しやすい博物館への進化と飼育生物の計画的繁

殖」ということで、上から2つ目と3つ目のところにつきましては、資料に関して、クラウド型資料データベースに移行するというのと、図書総合情報システムへの移行というのがあります。これは昔、この博物館はデータベースも含めて、情報システムを全部館内に持っていたんですけれども、今回のリニューアルを機に、外部に出していくという形に変更しております。

その一環としまして、収蔵品データベース、それから図書のデータベースも外に出しております。これは先ほどの表の後ろについている資料に出しておりますけれども、クラウド型のデータベースサービスに移行したという理由は幾つかあるんですけども、まずほかのデータベース、これから国際化が進んで、世界的に公開していくという流れができていく中で、当館で昔つくったデータベースというのがどうしてもガラパゴス化しておりましたので、これを打破して、世の中の潮流に乗せていくということを念頭に置きまして、会社とかで提供されている専用の汎用システムに移行したという経緯があります。

資料データベースに関しましては、将来的には世界中のそういう生物資料とかのデータベースであるGBIFとか、そちらのほうに参加していくということを念頭に置いております。

それから、図書のほうに関しましては、これはフォーマットを大学図書館と共通のフォーマットにしておりますので、大学の研究者とかから検索が容易になるような形になっております。また、OPACという全国の図書館のフォーマットにも合わせてありますので、そういう形で全国的な横断検索に耐えられるようにという準備になっております。

もう一つ、クラウド型サービスに移行した理由というのが、大きいのはセキュリティーの問題です。セキュリティーに関しては、日々、どんどん変わっていくわけなんですけれども、これを自前でやっていくと非常に大変であるということで、データベースサービスを利用していく場合には、そのデータベースサービスを提供している会社のほうで、日々、更新していくので、それにお任せにできるということになりました。

それから、3番目、これは前回、土井先生からお話いただいた災害とも関連するんですけれども、データ消失対策として分散化措置をとるという意味でもクラウドサービスを利用するというようになっております。

それから、行動計画の最後になりますが、7番の「『湖と人間』の関係を考える研究の推進」です。

研究部のほうで、研究成果をインターネットページを使って情報発信をしていこうと

というのが、最後から2番目のところにあります。

今、そのコンテンツをどうするかというところをいろいろ検討を進めているところなんですけども、大きな柱としては、個人ページの復活。前に個人ページというのがあったんですが、これの復活と電子図鑑の再構築というのを念頭に置いております。

電子図鑑というのは、先ほどのA4のほうの一番最後のところについておりますけれども、収蔵品データベースというのは、琵琶湖博物館に収蔵してある資料のカタログです。それに対して電子図鑑というのは、図鑑をページ上につくってしまおうというものです。現在、「珪藻」「里山のゴミムシ」「琵琶湖地域の火山灰」「気象観測データ」の図鑑が公開されております。昔、公開していたんですが、今、再構築中なのが、例えば「魚」の図鑑とかがあります。

そういうのを充実していくのと、もう一つは、データアーカイブ、こういうデータをとったんだけど、みんな使ってくださいみたいなものを提供していくというのも進めていこうということで、今その計画をしているところです。

それから、個人ページに関しましては昔はあったのですが、ちょっとシステム移行で一旦切れているんですけども、学芸員個人が自分の趣味でと言ったらあれなんですけども、いろいろ自分の書きたいことを書いているページがありました。例えば、統計学講座とか、火山灰についてとか、そういうのがありまして、結構そこへ直接見に来る人がいましたので、そういうページを復活させようということを考えております。ちょっと今のウェブの仕組みとうまく合うかなというところで、どうやってページをつくろうかというのを、ページをつくった会社と相談している段階にあります。

私のほうからの説明はこれぐらいで、大塚のほうから、先ほどの「はしかけ梁山泊」の話を提供させていただきたいと思います。

○事務局 ただいま、「はしかけ梁山泊」と言われましたが、「琵琶湖梁山泊」というのがこのグループの正式名称です。うまくいったところも、いまくいかなかったものもありますが、その辺も含めてお話ししようと思います。

まず、中高生の自由研究とか、部活での研究をめぐる状況についてなんですけど、いつの時代も、自由な研究活動にのめり込んで、すごいレベルに到達している少年少女はいるものです。しかし、少し前であれば、これはオタク的な研究だとか、あるいは中高生らしくないとか、そう言われて、なかなか評価されませんでした。

ところが、近年、アクティブラーニングなんていうのがはやってきました、この関係で自発的な研究活動の社会的な評価が上がりつつあるんですね。しかし、研究の水準が上がり過ぎますと、教師や親の指導も追いつかなくなって、しまいには助言すらできな

くなることもあります。そのときに頼りになるのが博物館などの社会教育施設なんですけれども、従来は、学芸員などの専門家のところに個人的に聞きにくることしかできませんでした。

さて、ちょっと観点を変えまして、では、博物館はこれまでそういう自分たちの関心を突き詰める中高生たちに対して、どういうことができていたかなんですけど、「正統的周辺参加」という概念があります。これはどういうことかといいますと、例えば、はしかけ活動では従来から、まず最初は親に連れられてきて、サービスの共有者として活動に参加していた子どもが、成長につれて、活動の運営側、ないしは中心人物へと成長していくということがしばしば見られました。

これは全てのグループを確認したわけじゃないんですけど、私の知る限りだけでも、「うおの会」とか、「里山の会」とか、「びわたん」とか、こういうグループでは、そういうことがはっきり見られています。あと、活動の中心というわけではないんですけど、はしかけに参加していくうちに研究レベルがどんどん上がっていった子どもについては、「たんさいぼうの会」とか、「琵琶湖の小さな生き物を観察する会」でも見られています。

というわけで、正統的周辺参加によってステップアップをするという仕組みはあったわけですけど、ただ、これは子どもと大人の数の関係の中に閉じてしまいがちなんですね。あとは、やっぱり孤立しがちになります。ただ、はしかけ制度をうまく活用すれば、この琵琶湖博物館が持つ研究資源を最大に利用して、個々人の研究を進めることができるだけではなくて、そういうレベルで研究している同世代の仲間たちとの交流を深めることができるようになるだろう。つまり、これで琵琶湖博物館を疎外されがちな自由研究の豪傑どもが集い、切磋琢磨する場とするのであるということ考えたわけなんです。考えたのは3年近く前になるんですけども、それで琵琶湖梁山泊というグループをつくったわけです。

何で「梁山泊」なのか。これは先ほど趣味という話がありましたけど、表向きの説明です。『水滸伝』に登場する梁山泊というのは、これは黄河の氾濫でできた広大な沼沢地のことです。「泊」という字は、中国語で「沼沢」とか「浅い湖」という意味です。転じて、そこに築かれた豪傑たちが集う。水の上の砦、「水砦(すいさい)」の意味となりました。

そもそも『水滸伝』というタイトル自体が、漢字で書くと、すごくいかつく見えるんですけど、日本語に訳すと、「水のほとりの物語」なんですね。こういうレベルの話なんです。

というわけで、琵琶湖の氾濫原に築かれた琵琶湖博物館は、これはももとは琵琶湖の氾濫原の中にあった半島に築いたものですね。そこに研究が進み過ぎて、保護者や学校が指導できるレベルを超えてしまった若き豪傑たちが集い、交流して、そして切磋琢磨する場とする、そういう砦とする。これぞまさに琵琶湖梁山泊であるというのが表向きの説明です。本当は、私の趣味でつけた名前かもしれません。

琵琶湖梁山泊とはどんなグループか。ここから先は、琵琶湖梁山泊のリクルートのとき。つまり、はしかけ登録講座で説明しているスライドをお見せします。

地域の自然や文化を研究する中高生が集うグループです。

こんな中高生にお薦めだということで、自分のやっている研究をもっと深めたい、これから本格的な研究を始めたい、研究にのめり込む同世代の仲間たちと切磋琢磨したい、こういう人はぜひとも琵琶湖梁山泊にいらっしゃいとやっているわけですね。

どんな研究をするのか。これについては、実はどんな研究でも構わないんです。

ただ、一応具体例がないといけないということで、今やっているのが、左側の2つぐらいです。一番左の「ミクラステリアス・ハーディ」というのは、琵琶湖で最近ふえてくる外来のプランクトンの仲間です。

その次が、化石の珪藻です。「スズキケイソウ」と言っています。

こっち側の2つは、海浜植物です。これはなぜかといいますと、実はこの琵琶湖梁山泊は、私は立ち上げにはかかわったんですが、代表が大槻達郎という海浜植物の専門家なので、リクルートに一応こういう写真を配置しているというわけです。年に数回、情報交換と相互交流のためのワークショップを開催していくので、そこから入ってくるのもありだろうということを考えています。

というわけで、琵琶湖博物館にはさまざまな分野の専門家が集まっていますので、研究のための材料とか施設、文献もそろっている。何よりも、興味・関心が近い仲間と出会うことができるということで、こんな形でリクルートをしているということです。

もう一つは、サポートメンバーというのがあるんですね。これはどういうことかといいますと、特にそういう研究を頑張っている中高生たちに対してアドバイスをしたりとか、あるいは一緒に考えたりしてくれるメンバーというのもはしかけの中から集めております。

というわけで、これをおとなのサポートメンバーと言うんですけど、お近くの大学生の皆さんとか、こういうことに関心のある人がいましたら、ぜひともお声がけをいただければと思います。

こんなことをやっているわけなんですけれども、実情はどうかという話です。現在、

中高生18人とサポートメンバー4人が活動中です。ただし、この中高生のうち14人は、一つの部活、米原高校地学部、この子たちが片っ端から入ってくるわけですね。そのうちの6人は受験のため、引退状態になっています。

あと、個別の活動は盛んに行われているんですけど、多くが私のところに、珪藻あるいはプランクトンの研究、相談に来ているという状況です。ここだけで活動している人はすごく少ないですね。学校の部活とか、他団体、「びわ湖トラスト」なんていうのがありまして、こういうところとかけ持ち、ないしはほかのはしかけのグループ、例えば「琵琶湖の小さな生き物を観察する会」とのかけ持ちということをやっています。

それで、それぞれの研究は後に紹介しますが、受賞多数で、研究費まで出てきます。なんですけど、受賞や研究費の獲得の主体は主に、琵琶湖博物館の外側にあります。

交流会は今のところ、年1回しかやっていません。これ、集めるのが結構大変なんです。なぜか。夏は自由研究の追い込みです。春と秋は学会シーズンで、みんな学会に行ってしまう。それで国際学会で発表した者がいるんですけど、そんなわけで、なかなかメンバーが集まれる時間がない。当然、中間試験、期末試験という、中高生の本分もありますので、そういうことで集めるのが大変だということがあります。

とはいえ、効果はあったかなというのが、ここにあるような話でして、例えばこういう子が出ています。米原高校の地学部では、高校1年生から珪藻の研究を始めまして、やがてどんだんのめり込んでいきまして、しまいには文献がないというので、手元にスマホを用意しまして、「Diatoms of North America (北米の珪藻)」というサイトがあって、1,000種類ぐらいの珪藻が載っているんですけど、これを駆使しまして、ほぼ自力で、自分の調べている化石の珪藻をほぼ全ての種類、種まで落とし切るということをやった子らが2人もいますね。その子らは、この間の夏の全国高等学校総合文化祭、パネル発表の部で、文化庁長官賞を受賞しています。

それから、「琵琶湖の小さな生き物を観察する会」とのかけ持ちの2人がいるんですけど、この「琵琶湖の小さな生き物を観察する会」というのはなかなか恐ろしいところで、実は根来さん、一瀬さん、石上さんとあるんですけども、引退したプランクトンの専門家が集まる会になってしまったんですね。あと顕微鏡の使い方を、この辺の学校の先生に教えている先生もいます。こういう人たちが集まる会になっているので、そこにやってきては、自分の研究のアドバイスをもらっては帰っていく、こういう活動をしている子もいます。その中の1人は、国際学会での発表もしています。

あと、実はこれは、東京からわざわざはしかけ登録をして、時々やってくる子がいる

んですね。埼玉県の谷戸のため池、これは休耕田を利用したところなんですけど、珪藻の研究を続けている会員がいるんですね。時々、水田の珪藻の同定相談とか、文献請求で連絡をしてくれているんです。今世紀に入ってから出ている水田の珪藻の文献全部、私、共著で入っていますので、ほかに相談に行くところがなかったということらしいんですね。2人は「たんさいぼうの会」でやった研修にも参加して、珪藻研究法の習得に努めています、この間、日本陸水学会で高校生ポスター賞の優秀賞を受賞したそうです。

ほかにも、京都在住の最年少の子、もう中3になってしまったんですけど、小学校のころからプラナリアの研究をされていて、琵琶湖博物館にはたまにやってきて、研究レポートの意見を求めるぐらいなんですけど、『子どもの科学』という雑誌のルイ殿賞というのがあるらしいんですけど、これを受賞したということです。

というわけで、余りやり過ぎると、中学生らしくないという批判を受けることにもなるんですけど、目いっぱい背伸びをして、いろんな人に後押しされながら、研究の高みを目指すのはよいことだと思っています。

彼女らの、あるいは彼らの多くは、日本語の図鑑や参考書で用が足りなくなると、中3から高1ぐらいから、AIの助けを借りたりとかしながら、英文の文献を読み始めるんですね。多くの英語論文は実は、おおむね高校2年生ぐらいまでの文法と単語の力があれば、あとは専門用語で読めるんです。だから、これはほどよい背伸びだと思っています。

これを例えば、ヴィゴツキー的に言えば、発達の最近接領域というのがあるんですね。自分だけでは手が届かない。だけど、仲間の協力、ないしは後ろから後押しをしてくれる人がいれば、越えていけるレベル。このものにとりついて、それを越えていこうと頑張るということは、価値のあることだと思っています。

探究の課題をみずから設定して、高いモチベーションを保ちながら、さまざまな人やものの助けを借りて、課題をクリアした経験というのは、必ず後の役に立つというふうに断言してもいいと思います。

最近では、もっと実利的なんですけれども、直近の推薦入試で役に立つなんてこともあるわけですね。ということもあって、のめり込んでもらいましょうというのが現在の琵琶湖梁山泊の展開です。

以上です。

○事務局：もう一つ、行動計画の表の中にはないんですが、前回の協議会の中で、土井先生からご指摘というか、宿題としていただきました災害と資料の保存についてどう考えているかということで、当館が今このように考えているということを説明させていただ

きたいと思います。

東日本大震災で多くの博物館資料が被害に遭った。それから、今年はブラジルの博物館が大火事になって、多数焼失したということで、先ほどお話しした ICOM の大会でも、災害と資料保存というのは、やはり大きなセッションテーマになっているぐらいでした。

私たちも当然、強い関心を持っているわけなんですけれども、私たちの館の中では、災害と資料に関しては、主に3つのブロックに分かれるというふうに考えて、対応を進めております。

1つは、この博物館が持っている資料をどうするかというところです。

2番目は、地域にある重要な資料が災害に遭いそうなときにどうするか。

3番目は、日本中、あるいはもっと広い範囲で災害に遭った場合に、どう助け合うかという3つになります。

1つ目の館単独のものに関しましては、今まで資料課のほうでいろいろ細かいマニュアルとかをつくってきているんですけども、それを今、改めて再編し直しています危機管理計画の中、それから業務回復計画の中で再整理して位置づけようというふうに考えております。防災に関しましては、ほとんど80%は予防のところに重点が置かれますので、そちらのほうを重点に、先に進めております。

一応どういう災害があるかということで、火災・地震・水害というのを想定しております。予防策というのはそこにあるようなことを考えております。

先ほどクラウド型データベースへの移行というのがありましたけれども、東日本大震災のときは、洪水で流されてしまったというのものもあるんですが、瓦れきの中から資料が見つかるんだけれども、対応する台帳がないので、それが一体何だったかを明らかにするのは非常に難しいというのが課題としてあったというふうに聞いております。そういう意味で、今、台帳資料の分散化というのが非常に重要なものになっています。

それから、主にあとは、緊急連絡網の整備と、それからしっかりそれを回していくというのをやっております。

回復過程については、実はこれは非常に多岐にわたるので、情報収集の段階にあります。今回、東日本大震災で被災した資料の修復がいろんな館で行われて、この博物館でも昆虫標本の修復をしたわけなんですけれども、そういったノウハウというのは、今、ネット上に上げて、みんなで共有していこうという動きがありますので、そういうところの共有化を図っていくということを考えております。

それから、2番目の地域資料に関しましては、これはどちらかというと、地域にある

文化財の保全というのが大きくなってきます。これに関しては実は、文化庁であるとか、あるいは県・市町の文化財保護関係とかが中心になって、あるいは県博協とかでネットワークづくりを進めておりますので、そこに参加するという形で考えております。

それから、他館との資料保全教育。文化財に関しては、文化庁とかの収蔵で、いろいろネットワークが構築されているんですが、自然史系の資料については、まだ余り、資料として認めてもらえてないというか、国のほうで動くというのがないので、博物館のほうで自主的にネットワークをつくって、情報交換をしていこうというのがあります。

例えば、このあたりで言いますと、日本動物園水族館協会とか、西日本自然史ネットワーク等がありまして、そちらのほうで災害時の助け合いということについてはネットワーク化が進んでおりますので、こちらに参加するという形で行っております。

以上、行動計画と関連するところの報告をこれで終わらせていただきます。

○会長：ありがとうございました。

それでは、質疑、意見交換に入りたいと思います。後半のリニューアル以外につきましては、どんな話題でも結構ですので、皆さんのほうからどんどん出していただきたいと思います。

○委員：こんにちは。県の障害福祉課から来ております。

まず聞きたいことがあるのは、A3の資料の2ページ目の学校との連携というところですが、私の所管は障害福祉課ですので、ここの想定は何となく一般校なのかなと思いますが、リニューアルに関わって、別館に養護学校、特別支援学校さんがこぞって来られても、十分に排せつだとか、いろんなことに着目したリニューアルがされたということもあるので、ここの地域の中学生、高校生というところの、研究とまではいかないかもしれませんけれども、特別支援学校とのそういう連携というものは想定されているかということをお聞きしたいと思います。

それと、4ページのところの、資料のデータベース化とか、そういうところは余り深くはよくわかりませんが、昨今、私どもの課でも、情報アクセシビリティというところがすごく論点に上がってくる時代になってまいりましたので、ここは保存の部分なのかもしれないですけども、アクセスするのに、障害があろうとなかろうというところの観点をお聞きしたいというのが2点目でございます。

それと3点目は、この博物館の状況の報告のところ、寄附金が136社、9,772万円という結構な額を、累計ではあるにしても、相当額寄附いただいているというところで、やっぱりこういう貢献していただいているようなところは公開というか、そういうものがなされているのかどうかということをお聞きしたい、これが質問の3点目です。

それと、2点、提案があるのですが、2ページ目に移動博物館というのがありますね。そこで彦根のビバシティを使ってということで、商業施設を使うというのは、昨今、障害福祉課でもとてもよく使っているところで、特別なところで「ぴかつtoアート」という障害者の芸術展をやっても、なかなか足を運んでいただけないですが、イオンモールとかにお部屋を借りて開催すると、結構足を運んでくださるというか、ついで見に来てくださる、それを見に来た人が商業施設で買い物をするという、お互いさまという感じでにぎわっています。皆さん、ご存じかどうかわかりませんが、5年後に国体——「国スポ」と名前が変わりますが、「国スポ」と、障害者スポーツ大会「障スポ」が5年後、滋賀県で開催されます。その5年間の間に、いたるところでスポーツイベントが行われます。なので、そこら辺とコラボして何かをしていったら、人が集まって、スポーツじゃない子にも、いろんな興味を持ってもらえるのではないかな。僕ら、スポーツ見たくないけど、琵琶湖博物館の展示物なら、おもしろそう！みたいな感じで、うまくいくんじゃないかなというのが1点です。

それと、ナイトミュージアムは、私も寄せていただきましたが、びっくりするぐらい盛況でした。その日が雨で、いろんなイベントが中止になったということもあって、夜、どこか連れて行って～と言う子どもたちを連れていくのにも、格好の場所だったのかもしれないですが、私もその口ですが。

その件数を分析していただいているのですが、やっぱり来館手段が、車が94%になっています。車というのは恐らく自家用車ですよ。こういうイベントをするときには、もちろんイベントがあるということを隅々まで周知することがまず大事だと思います。それに伴ってシャトルバスを運行しますから、ご年配の方も、障害がある方も、どうぞバスに乗ってくださいというような運行があったらいいのになと思いました。

この2点を提案させていただきたいと思って、意見を申し上げました。以上です。

○会長：ありがとうございます。

3点のご質問と、2点のご意見ということですが、順番にいきましょうか。

○事務局：交流係の係長をしています八尋です。ご意見ありがとうございます。

特別支援学校との連携についてですが、先ほど言われたとおりに、別館ができて、そこで排せつや昼食とる場所ができるなどして、非常に利用が増えました。その特別支援学校の生徒さんがものすごく増加して、利用の幅が広がったことがあります。

それと、もう一つ、私が記憶しているところによりますと、昨年、特別支援学校の生徒さんをこちらの博物館に呼んで、例えば骨をさわるとか、あるいはいろんなものをさわったりするような、特別支援学校と博物館が連携した、取り組みを博物館でしたこと

があります。具体的な名前はちょっと忘れたんですが、そういったことで連携を進めさせていただいているところです。

以上です。

○会長：いいですか。

○委員：それはどちらから呼びかけたんですか。学校からですか。

○会長：それは学校からのリクエストなのか、こちらからの呼びかけですか。

○事務局：多分、学校から依頼があつて、博物館にも学校の教員がいますので、一緒に連携して何かやっついこうという、非常に大きなことをやったことはあります。昨年度ですかね。

○会長：よろしいですか。

じゃ、次、お願いします。

○事務局：2番目のデータベースのアクセシビリティの問題ですけども、本体のホームページのほうは、アクセシビリティを考慮して、GISでチェックできるようにという機能を入れております。今、トップページとかがいまいち使いにくいというのがあつて、改造しているところなんですけども、見ていただくと、字が昔に比べてやけに大きいというのがおわかりいただけると思うのですが、その辺はアクセシビリティを考慮したものになっています。

ただ、データベースのほうに関しては、データベース会社が提供している汎用のものでやっていますので、まだそこまで対応は考えられてないと思います。今後、そういった方向で、いろんな博物館からの提案を受けて、やっていきたいというふうに考えております。

ですから、ホームページのほうは、一応アクセシビリティを考えております。データベースのほうはこれからということになります。よろしいでしょうか。

○委員：すみません、ちょっとだけずれている感じがあるんですけども、私がお伝えしたいのは、情報に誰もがアクセスしやすいUDの考えを含んだ情報アクセシビリティになっているかということなので、もちろん、社会の構成としてお年を召した方がどんどんふえている中、フォントを上げるというのはあたり前のことで、それで視覚障害の方であるとか、知的障害があつても、パソコンをたたく人は幾らでもいますので、特に視覚障害の方は移動困難という障害をあわせ持っているの、来にくいということで、博物館のことをいろいろ知りたいなと思ったときに、実は残念ながら、滋賀県のホームページはすごく見にくいと言われているんです。それで、ちょっとリニューアルして下さっていて、よくわからないんですけど、テキストにしたらいいか何とか、当事者さ

んがよくわかっておられるので、その辺の意見を聞きながら、視覚障害があってもちゃんとアクセスしやすいものになっているのかなというのをお聞きしたんです。

○事務局：すみません、実際に使う方のご意見を伺うとかいう機会は、まだやってないので、そういうことは積極的にやっていきたいと思います。

3番目のご質問は、寄附をいただいている企業に関して何か公開しているかということですが、これは広報営業課長から。

○事務局：寄附の関係ですけれども、資料にもございますように、現在は寄附・協賛合わせて249社からご厚志いただいております。ホームページで企業さんを公開させていただくとともに、特典といたしまして、リニューアルサポーターには、入り口の横のところに銘板掲示、そのほか水槽サポーター、樹冠トレイルサポーターについては、それぞれ該当箇所に銘板掲示等で公表させていただいているところでございます。

○委員：銘板掲示って、何か張ってあるんですか。

○事務局：銘板って、お名前ですね。水槽を見ると、支援いただいたところが何とか企業とか出て、サポートいただいていますというのをやらせていただいています。それから、視察なんかがあったときにもよく聞かれますので、これはご支援いただいているんですよというふうに説明させていただくことが多いです。

それから、提案が2件ございました。移動博とナイトミュージアムについてなんですけれども、まず移動博、スポーツイベントでやったらどうかというお話なんですけど、実は去年、「湖フェス」というボートとかでやるもので参加しております。去年は8月にそれやりましたので、熱中症で倒れる人、救急車が来る中、砂浜でやるという過酷な体験をいたしましたけど、今年はちょっと人手が足りなくて、お誘いいただいたんですけども、行けなかったのが、積極的にいきたいというふうに考えております。

それから、ナイトミュージアムのバスなんですけども、実は増便していたんです。増便していたんですが、やはり車で来られる方が多いというのがありました。

○委員：情報が周知されていなかったんじゃないですか。

○事務局：こここのところで、バスがいいねと言う人が増えてくださり、バスの利用者が増えると、バスも増便されるというのがあるので、何とかそういう形で伝わればなというところがあります。

○委員：増便なんですね、特別便じゃなくて。

○事務局：そうですね。夜の間もずっと走っている状態。何本ありましたか。

○事務局：往復合わせて11便です。

○事務局：往復11便出したということです。

以上でよろしいでしょうか。

○委員：その数値はないんですか、バスで来られた数値というのは。

○事務局：残りの何%ということです。

○委員：そういうことですね。

○会長：ありがとうございました。

では、次の方、どうぞ。

どなたでも。

○委員：もうご存じかもわかりませんが、前回、滋賀県で国体をやったときに、今はもう制度が変わっているのかどうか知りませんが、私、ちょうどそのとき琵琶湖文化館におりまして、そのときに国体は運動だけではなくて、文化にも予算をつけてくれたんですね。当時、3倍ぐらいの予算が国体の事務局からなのか、文科省なのかわかりませんが、そういう予算がつくということで、そういう予算があるんだということはご存じですか。確か、あのときに、秋に私ども、大体1,000万ぐらいの展覧会をしたときに、3,000万ぐらいついた記憶があるんですね。もしそういう予算が今も生きているならば、それはソフト面だけですけれども、そういうものも、先ほど委員からのご提案があったように、5年後にそういうことがあるならば、ちょっとその辺のお金も探ってみられるのも一考かなというふうに思います。

○事務局：どうもありがとうございます。

今、情報をいただきましたので、私ももう一度、そういう面から探りたいと思っているんですけど、私が今、情報を把握している中では、来年度の東京オリ・パラについては、文化も一緒にやろうという形で広く展開されて、国のほうからも指導されたんですけど、国体面につきましては、特段ちょっとまだそういう方向ではなくて、ただ文化もスポーツも一緒にやっていって盛り上げていこうというのがあります。県庁の中で文化スポーツ部というものができまして、文化の面も含めてスポーツと一緒にやっていくという方向でありますので、そういう面からもう一度確認させていただきたいと思います。

○会長：では、次の方、どうぞ。

○委員：まず一つ、先ほど大塚さんから「琵琶湖梁山泊」のお話がありましたけれども、本当に素晴らしいなと思いました。私、公私ともずっと自然観察をやってまして、小さな子どもさん、ゼロ歳から、ずっと一緒に野外に出て、自然に親しんでもらってという活動をしていて、幼児のお母さんたちがなるべくそうやって自然へというふうに頑張っているお母さんたちもいらっしゃるんです。子どもたちは十分自然が好きになって、今度小学校に上がって、虫なんかの名前をよく知っている子はすごくヒーロー

になれるそうです。ですが、それが大体中学年ぐらいまでで、4年生ぐらいになると自然離れが始まって、前だったら、キリギリスなんかをぎゅっと捕まえていた子がヒーローだったのが、わぁー、そんな怖いか、私の知っている中学生の子がいるんですけど、蛇を学校に行く途中に捕まえて、後でゆっくり調べようと思って、みんなに迷惑がかからないように上靴の袋に入れて、ロッカーの中にしまい、大事に持っていたのが見つかりまして、その後どうなったかという、お母様が呼び出されて、叱られるということが起きたり、ある男の子は、幼稚園、小学校とすごい自然が大好きで、小学校で本当に自然の好きな心を育み、中学に上がる。そうすると、クラブ活動がありますね。そうすると、フィールドに出る機会も少なくなり、自分の好きな昆虫の話をしたりとかすると、逆にみんなに変わり者扱いをされて、いじめに遭うこともあるらしいです。それを聞いたときに、本当に悲しくて、今、幼保連携と言っているんですけど、そういう子どもたちが実はたくさんいるんじゃないかなと思って、大塚さんがいろいろお話ししてくださったときに、その子たちの顔がずっと思い浮かんで、ぜひ紹介しようと思ったんですけど、それは多分、こういう施設があるからではなくて、共感してくださる学芸員さんがいらっしゃって、迎えられるということが何より大事かなと思います。どうぞ頑張っていて、皆さんを受け入れてあげてください。

それと、すみません、もう一つなんですけど、私自身は自然観察指導員というのをやっているんですけど、それ以外に最近、「木育」というのを進めていまして、自然と人をつなげるだけではちょっと足りないなと思うことがあって、例えばフィールドにしている森はどんどん荒廃していっています。それは昔の農薬とか何とか、そんなのではなくて、放棄されていっているんですね、シカやイノシシの問題とか林業の問題とかが絡んで。木が柵の向こう側になって、どんどん放棄されて、桜なんかは毛虫がくるというので、ぱったり切られる。どんどん人と自然が離れていく。そして木なんかも、私、名前を紹介したり、お花を紹介したりするよりも、やっぱり中身を紹介しないといけないんじゃないかと思って、最近、ものづくりを一生懸命頑張っているんです。

その関係で、この間も森林政策課ともいろいろ打ち合わせをする機会がありまして、そのときに琵琶湖博物館とも連携して、展示のほうをさせていただくようになりましたと伺いました。それは具体的にひよっとしたら、このリニューアルのところの一部あった分じゃないかなと思って、それをちょっとお伺いしたいのと、基本計画のところ、  
「木から森へ」の博物館学の追求ってあるんですけど、そここのところその後、「木から森へ」、そして人の暮らしまでぐるっと回るような研究というのも展示で見られたりするのでしょうか。すみません、お願いします。

○会長：ご質問に対してお願いします。

○事務局：森林政策課さんと一緒にというのはギャラリー展で、向こう中心でやろうというところで話を進めております。

「木から森へ」のところは、ちょっとこれはお話が違っていまして、博物館の創造基本計画のところ、昔、琵琶湖博物館の活動を木に例えたのを、もっと広がりをとということで森にしたというお話なので、木とか森を扱うという意味では、申しわけないんですが、これはちょっとないということになります。

おそらく森との関係に関しては、今、C展示室に一つコーナーがありますし、それから新たにできてくるB展示の中でも取り上げられることになると思います。

○会長：梁山泊につきましては、何かコメントはないですか。

○委員：失礼します。中学校長会の代表で来ています。

「琵琶湖梁山泊」のことですね。取り組みの内容は、先ほど委員さんがおっしゃられたように、本当にすばらしいと。まさに琵琶湖博物館でなかったらできないことだというふうに思いました。

ただ、書かれた内容については、期待も込めて幾つかひっかかるところがあって、一つは子どもと大人のつながりの中で、孤立するとか、それから中学生らしくないとか、探究心とともにそういったところが琵琶湖博物館に来て、さらに深く本格的に専門家や仲間のサポートを得て、さらに大きなものになっていくというところについては、非常に難しい問題ですが、例えば私、この関係でいわゆる自由研究や発表会の場に審査員として呼ばれて、この10月の下旬にも同じようなことがあるんですが、作品で言うと、小学校は非常に自由研究とか発表の内容が多くて、結構頑張るんですが、中学校は軒並み減ります。ものすごく減る。それはいろいろな理由があって、ほかにいろんな研究をしなければいけないとか、興味も多様化する中で、自然科学とか理数科離れというところになっていくこともあるんですが、子どもたちはどうしても燃え尽きたようにして、小学校6年生で閉じてしまうということが結構あるんですね。具体的には、近くの中学生でも、小学校で日本一に輝きながら、中学校になったら、はたと研究する気がなくなったので、それからその自由研究を続けることはできなかったとか。

もう一つは、幾つか作品はあるんですけども、非常に中学校の内容ではレベルが高いものばかりが出て、それこそ、まさに先ほどの中学生のように、中学校の知識とか感覚を超えたもので、極端に言うと、専門誌の研究論文ぐらいすごいものがある。反面、そういったところの内容を、発表会の機会に選ばれて来た子が、それを見て、次の年からできなくなったとか、結構そういう事例があるということです。

そういう意味で言うと、一体我々が、新学習指導要領にもよく出ているんですけど、何を学ぶかとか、どのように学ばせるかとか、学ぶ力とか探究心とかつけたものをどういように育てていくかというのは、非常に難しい問題だとやっぱり思います。

そういう意味で言うと、ここに来て、結構、研究発表会の中にも琵琶湖博物館とか、その他の施設へ導いていただいたことを、こんなにレベルアップして発表したという事例もある中で、本当に素朴に探求心を持って、そういう力をつけていくという子どもたちが、どこでそういったところのことを育てていけるんだろうということは、中学校の立場としても非常に心配をしていると。

私もずっとここでお世話になったり、理数科教育がどんどんどんどん、ある意味ではしっかりやらないとというふうに文科省からもいろいろ言われている中で心配しているところはあるんですが、どうぞ先ほどのそういう意味で閉じるということが、本当に専門的に頑張ろうという子どもたちをどんどんどんどん導いていただくとともに、学ぼうとか、探究心とか、そういうところでそれが次につながっていくような興味の原点のところから、琵琶湖博物館のほうが導いていっていただけるようなところに視点を当ててもらえればというふうに、ちょっと言葉が足りませんが、いろいろな立場で審査員とかをしながら、そういうふうに思います。

以上です。

○会長：現場からの貴重なご意見、ありがとうございます。

ほかに関連して、ご意見。

○委員：梁山泊なんですけど、人が機嫌よく、すばらしい、すばらしいと言っていると、水をかけたくなるのが私の悪いくせで、子どもってやっぱり小さいときは非常に好奇心がありますよね。魚を見たら捕まえたいし、虫を見たらとりたくなるし、基本はこれだと思っうんですね。これを中学、高校、大学まで、大人まで持っていけるかというのをサポートしてくれたらなと思っうんですけども、さっきのコンテストとかを見ていますと、何となく大人のおいがる。子どもらしいのがいいとは限りませんが、大人の価値基準で賞を与えたりするのは、いいことか悪いことか、どっちかわからないと思っうんですね。

子どもに下手に賞を与えますと、自意識が強くなって、自分で自分の首を締めることが起こり得ないとも限らないと思います。そこを十分注意して、やっぱりプロの学芸員の方は指導をしてほしいなというのを思っうんです。だから、ものすごく難しいんですね。このごろ学会でも、高校生部とかあるんですけども、いいことなんですけども、私、実は大嫌いで、高校生は受験勉強をしたらいいじゃないかということを、実は僕、

思うわけです。それで基本的な勉強をしておいて、大学に入って研究をやりたければ、ぼんぼん好き勝手やればいいので、好き勝手な研究をするために地力が必要なんですよ。その地力をつけなきゃいけないときに偏ってしまったらという、ちょっとそういう危惧を感じます。

ただ、西洋の博物学者で天才と言われる人がいまして、6歳でラテン語を全部やったりとか、そんな大きな仕事をする人も中にはいます。それは天才で、本当に普通のようにできる子たちをどう伸ばすかというときになりますと、大人のにおいで縛ってもいいのかなという感じがしますので、梁山泊というのは、実は私、やくざの集まりでいいと思っているんですけども、やくざがやくざでないような感じがします。

○委員：今まで「琵琶湖梁山泊」のお話、自由研究のお話が出ておりましたが、実は昨年度の滋賀県の自由研究では、こちらの学芸員の先生方にお世話になった子どもが3名、科学の甲子園と言われる学生科学賞に出展しております。うちの息子もちょっと出展させてもらっているんですけども、そういった子どもたちがこちらのほうに来館して、学芸員の先生方にずっとサポートしていただいているんですね。本当に私たち保護者でも追いつかないような知識を先生方が子どもたちに寄り添って、大人の圧力とか専門的な知識というのではなくて、子どもの視点でどうやっていったらいいかなとか、答えではなくて、ヒントを与えてくださるんですね。それで、すごく子どもたちも成長しているということで、本当に先生方のお力と、温かいお心と、聞きやすい環境といいですか、こちらのディスカバリールームに行ったら、質問コーナーというのがありますよね。ああいうところで子どもたちが自然に聞けるというところが、やっぱりこちらの博物館のすばらしいところで、全ての子どもたちやたくさんの方にそのよさを知っていただきたいなと思っています。

そして、「琵琶湖梁山泊」ですけれども、学校の中には科学部とか生物部とか、そういうのがない学校があるんですね。でも、その学校の中でもやはりそういう科学に興味を持っている子どもとかがたくさんいると思うんですが、なかなか学校内とかでそういう部活がなかったり、部活が忙しくてなかなか時間がとれなくてというのもあると思うんですけども、こういう活動があるよということを、もし子どもたちが知っていたら、あっ、おもしろそうだなとか、ちょっと行ってみたいなというふうになるんじゃないかと思ったんですけども、この梁山泊の活動については、学校のほうに広報されたりとか、何か子どもたちに呼びかけるということはされるのでしょうか。

○事務局：実は、その辺がちょっと手薄になっていまして、サポートメンバーの中に2人ほど現役の学校の先生がいらっしゃるんですね。1人はこの間引退されましたけれども、

この人たちに声をかけてもらうようなことをやっていたんですけども、もう少しいろいろなところに情報がいくようにしたらよかったかもしれないです。

もう一つは、理科教育の研究会などでこういう活動をやっているという話を話題にしてもらったこともあるんですが、そこまでですね。ですから、やっぱり宣伝が足りないのだらうと思います。

もう一つは、今おっしゃったように、もともとはこの研究を進めたいんだけど、周りに部活もなければ、サポートしてくれる人もいないという人たちを実はメンターゲットと考えたんですけど、実際にはそんな仕組みに余りになってない。むしろ活動を頑張っている人が寄ってくるという形があるので、そこについては1人でも琵琶湖博物館に来たら、研究を始められて、仲間が得られるみたいな話をもう少しアピールしてもいいんだらうというふうに思いました。

○会長：ありがとうございます。

では、どんなことでも結構ですので、まだ発言していない方。

○委員：今、小学校3年の息子がいまして、梁山泊の話もすごく興味深く聞いていたんですけど、実際に私たちが直面している親の問題として、実はうちの子、春からアリの巣を夏に研究するんだって、すごく張り切っていたんですけど、担任の先生が自己紹介のときに、世界で一番嫌いなものではアリですって言ったんです。「学校のアリの巣を研究したいけど、先生が見なきゃいけないから、やめとくわ。先生、嫌がるし」と言って、やめたんですね。お母さんたちも、子どもたちが宝物だといって持ってきた、子どものころからいっぱい拾ってきた石とか、葉っぱとか、貝殻とか、山ほどあるんですけど、これをいかにごみにしないで済むかというところにすごく頭を悩ませていまして、私自身も実は文系の学部出身で、子どもがすごく科学的な関心とか自然に関心を持っているんですけど、本当に基本的なところで、じゃ、それをどうまとめてあげればいいのかとか、例えば標本をつくるとか、標本的に管理をすることもそうですし、レポートを書くということがどういうことかも、絵日記以上のことはわからないみたいなのがありまして、先ほどいろんな方がおっしゃっていましたが、本当に幼稚園、小学校低学年ぐらいのときに誰もが持っている興味・関心を本当に自分たちがやりたいと思ったときに形にしていけるような基本的なスキルとか物の見方を、ぜひ博物館で教えていただける機会があったらなというふうに思います。

大津市のほうで、「はつめいキッズ」ですとか、星空観望会といった低額で割と参加できるような科学的な機会があるんですけど、本当に電話がつながらなくて、1時間ぐらい後にかけてたら、もう満席ですと言われるような状態ですし、私の周りのお母さんた

ちでも、京都までわざわざお金を払って科学教室に通わせている子どもたちがたくさんいます。でも、一方で、やっぱり科学室の実験ではなくて、本当に自然に関心を持つ方たちが、自然観察ではなくて、もう少しそれを加工したり、自分の関心を深めていくというところの橋渡しをしていけるところがすごく足りないなというふうにいつも悩んでいるところがあるので、梁山泊に進みたいと思うような子どもたちを育てるサポートをぜひ考えていただけたらなというふうに思います。お願いします。

○会長：ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○委員：私も梁山泊は賛成派です。賛成派と反対派に分けているわけじゃないですけど、もちろん学校側で困っているようなことがあるかもしれないですし、お母さん方が困っている、やってほしい、いや、やめてほしいという意見もあるかと思うんですけども、それを大きく捉えたら、私は障害福祉課にいるじゃないですか。そしたら、普通の子に育ててほしいとやっぱりみんなが思う。学校の先生は、普通の子のほうが教えやすいんですね。普通って何なんやろうと思ったときに、蛇を後で調べようと思って、袋に入れていた子の先生が、ちょっと学芸員さん風の先生で、おっ、すごいなとか言って、ちょっとこの箱に入れようとか言って、逃げないようにしないと、みんなびっくりするかなみたいな感じで、その子の調べたいという気持ちを大切にしてくれるような先生だったら、きちんと持って帰って、お母さん、ぎゃーって言うかもしれないけど、ちゃんと調べて、探究心を満足させて、その子はそこら辺にぼいと捨てるんじゃないで、山まで持って行って、放すことができる子かもしれないですし、やっぱり周りの大人、だから梁山泊だけがいいというわけではなくて、もちろんそういう受け皿があってこそですけども、それを支えるみんなの大人の声かけとか、まず先生方の声かけ、そんなことしないで勉強しろじゃなくて、おお、ええことやっているなあ、それをするためにはやっぱり国語がしっかりしてないと、文献を読み切れないよとか、さらに英語が読めないと、海外の文献は読まれないよみたいな、また寸法をはかるのに、算数ができなかったらだめだよとか、そういうふうに勉強がベースにないと積んでいけないよということを先生がきちんと伝えてくれるとか、何か役どころを分けて、親御さんもそんなこととしないで、塾行かないとじゃなくて、突出している部分をきちっと伸ばしていったら、普通から見たら、変わった人なのかもしれないけど、きっとゆくゆくは琵琶湖博物館の学芸員になれるかもしれないという、満遍なくじゃないからこそ、こうやってちゃんとお仕事につかれているんだと思うんですね。

塾って、私、聞いたことあるんですけど、できないことを学ばすために行かさないで

くださいって塾の先生が言っていて、いや、すごくできるところを塾に通わせて、もっとそこを突出させたら、ほかはおのずと上がってきますみたいなことを話していたことがあって、やっぱり何か自分の軸となる、自信となるものがぎゅっとあったら、ほかのものは上がってくるという話を聞いたことがあるので、そういう意味でも、いいとか悪いとかじゃなくて、周りの大人がみんなで声をかけて、その子の社会的なスキルとか学業ももちろん必要なんだよと、これをやるためにはみたいな感じの言葉かけをしていくということ、みんながすればいいんじゃないかなと思います。それは社会において、障害があってもなくても、障害が重くても、その人の役どころがあって、健常であっても、できないことはあるんだよねという共生社会につながっていくんじゃないかなと、すごく聞いていて思いました。

○会長：ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○委員：とりあえず手を挙げさせていただきました。

私は企業から参加させていただいているんですけども、今、企業連携でトンボをテーマに環境保全のほうを進めさせていただいているんですね。そういった活動の中で、業務の中でも場内のトンボ、網を持ってトンボを探しに行ったりということが多いんです。そういう活動をしていると、活動の中で観察会とかして、子どもも来るんですけども、網を持った大人がたくさん集まってくるんですね。今までこういう活動をしてないと出会わない人なんですけど、そういう人たちもたくさんいるので、これはだめとか、あれはだめじゃなくて、やっぱりそういうほうに進む方もいるので、何か私は梁山泊は、それはそれでいいのかなと思いました。

○会長：ありがとうございます。

梁山泊以外でも結構です。

○委員：全く離れた話ではないんですけども、私、ここに初めて寄せていただいたときに、未就園のお子さんのサークルとかの支援をしていますので、親子で楽しめる、裾野を広げるという意味での参加かなと思って参加させていただいていました。そういう意味では、ちょっとお利口さんの行くテーマパークみたいな形で、ちょっと気軽に親子で、みんなで楽しく1日過ごして、レストランでおいしいものを食べて、お土産を買って帰るみたいな、そんなイメージでの利用が増えたら、もしかしたら博物館さん、喜んでくださるのかなと思って参加させていただいたんですけども、また逆に、その筋のものすごい専門家の方にお話を伺うと、いろんな分野のてっぺんの方が集まられて、展示や研究のことを語られることを思うと、その差にちょっと驚くというか、なかなか私自身が

ついていけない。先ほどの韓国語のすごい資料とかを見ても、さっぱりわからないのですけれども、そういうことを日々、世界の中で発信されて、ナンバーワンになれる方もいらっしゃると思う中で、その中間を埋めるのが、この博物館のお役目なのかなと思うようになりました。

そういった意味で、多くの方が来られる、ほとんど90何%の方はテーマパークとして来られるんですけども、そんな中で裾野が広がるとてっぺんが高くなるという言葉もありますので、その中間をどうやって段階づけて、上に上がっていくか。その中の割と上のほうの仕組みが今の梁山泊の仕組みであって、その手前は博物館がすることなのか、地域の例えば子どもの森さんのようなところが担うものなのか、学校の部活の先生とか理科の先生が担うものなのか、そういった意味も全部含めて、この博物館がどこにどれだけの力を注入されるかというか、もちろん予算と人的なものがあると思うので、そういった中で博物館に来た人は、博物館に来た2時間ほどで一步でも階段が上がればいいし、そのためのいろんな資料であったり、ITCだったりと思いますので、そのてっぺんを目指す中途のところを一個一個埋めるのに、展示の工夫とか、今はちょっとその下のほうの部分に注力が大きいのかなと思うので、真ん中あたりから上に引き上げるような行動計画というか、これからの計画をもう少しわかるようにしていただければいいなという感想を持ちました。

以上です。

○会長：大変大事な点をご指摘いただいたと思います。

それでは、ちょっと報告が残っていますので、A展示室、B展示室のリニューアルについてご説明を今からいただきたいと思います。

### (3) 第3期リニューアルについて

○事務局：新琵琶湖博物館創造室の梅村でございます。

「琵琶湖博物館第3期リニューアル」につきましては、私からご説明させていただきます。

協議会のほうには、これまでリニューアルの概要等についてご報告させていただいておりましたけれども、展示物の検討も進められていることから、新展示の狙いや象徴的な展示について、お手元の資料によりご説明させていただきます。

資料3のほうをごらんください。

A展示室では、テーマを「湖の400万年と私たち～変わる大地・気候・生き物～」とし、過去の環境は現在と無関係の遠い昔のことではなくて、過去から一連の変化によって現

在の環境が成り立っている、さらに未来へと続いている。そうした視点で紹介し、来館者が地域の環境を考えていただくきっかけとなるような展示としたいと考えております。

象徴となるような展示につきましては、いわゆる目玉でございますけれども、A展示室では、現在も象徴的な展示である高さ4メートルのコウガゾウの骨格化石に、左半身に肉づけいたしまして、重量感や筋肉の質感を実感していただきます。大型のコウガゾウの半骨半身標本につきましては、世界初となるものでございます。

次ページをごらんください。

琵琶湖の地層に関しましては、世界有数の古代湖であり、400万年の地層が重なっている、琵琶湖の生い立ちの情報が詰まっていることをわかりやすく紹介させていただくとともに、これまで余り見ることができなかった地層と、ある種の美しさのようなもの、そういったものを表現できればと考えております。

その下にお示しさせていただいておりますように、地層を引き上げたり、模型を手にとったり、そういう動きが体感できるような展示にしたいというように考えております。

B展示室につきましては、3ページ目になります。

テーマを「湖の2万年と私たち～自然と暮らしの歴史～」とさせていただいております。これまでの歴史展示は、時代区分に沿って展示を行い、文化財をもとに人間社会の変遷や発展の経過を展示する人間活動を中心とした歴史展示を行ってまいりました。B展示室では、今回、人間の歴史に自然史を加えて、人間と環境のかかわりの歴史を紹介し、地域の環境と自治を考えていただくきっかけとなる、そういった展示を目指しております。

B展示室の象徴となる新展示につきましては、前回の協議会でもいろいろ意見をいただきました龍でございます。入り口で巨大なオブジェで来館者をお出迎えさせていただきます。「近江の竜王信仰」に基づく湖や水のシンボルとして、人と自然のかかわりを考えるきっかけとするとともに、展示室の各コーナーでもナビゲーターの役割として龍を登場させたいと考えているところでございます。

また、これまでB展示室の象徴でもございました丸子船につきましては、新たにAR（拡張現実）の技術を活用いたしまして、タブレットやスマホの画面を通じて、帆を広げて、荷を積んで、江戸時代の風景の中を帆走する丸子船を再現いたします。そのほかにも、船体に触れたり、形や大きさを体感したり、またいわゆるインスタ映えするような撮影スポットも用意させていただく予定でございます。

5ページ目、漁撈用具や船大工のコレクションにつきましては、県初の国登録有形民俗文化財で実物展示させていただくとともに、地引網の巻き取り作業や「エビタツベ」

の原寸大のジオラマ、そういったもので琵琶湖の漁業を体感してもらえるような展示を予定しております。

スケジュールにつきましては、6ページをごらんください。

実施設計につきましては、昨年度終えておりました、工事につきましては、去る7月2日に株式会社乃村工藝社と契約を締結させていただいております。既に造形物等の検討に入っておりますが、展示工事に伴う閉室を本年11月25日に予定しております。工事期間につきましては、来年の7月までを予定しており、晴れて来年7月にグランドオープンさせていただく予定でございます。

そのほか資料といたしまして、A・B展示室、それぞれの鳥瞰図、平面図を添付させていただいております。

私からの説明は以上でございます。

○会長：もう既にこれは進んでいることですので、ご報告として承りたいと思いますが、何かご質問とかありましたら。

よろしいでしょうか。

では、リニューアルオープンを楽しみにしておきたいと思えます。

オープンした後の活用方法とか、そういったことについて、さらにご意見ということがありましたら、それも伺っておきたいと思えます。

#### (4) その他

○会長：特になければ、時間があと10分余りありますので、あとはフリーディスカッションということで受け付けたいと思えますが、前回、委員のほうからご意見がありましたリスクマネジメントにつきましては、資料でもって館のほうからご説明いただいたところですけども、何かございましたら。

○委員：災害と資料保全について、真剣にお考えいただいているというのがよくわかりました。

ここからは釈迦に説法みたいな話になりますけれども、いざというときには、やはり人と場所なんですね。特に現物資料を扱っております博物館にとっては、それを保全するということは、その場所がどうしても必要であると。いざというときを想定をして、どの施設で何平米の床面が確保できて、それが安全に、あるいは盗難等を含めていかに保管できるかということの実数を割り出しておけば、いざというときに非常に便利かというふうに思います。

それから、これは必ずしも琵琶湖博物館だけで完結する話ではありませんけれども、

緊急避難をして、例えば琵琶湖博物館やあるいは近代美術館へ運び込むときに、この間の東日本大震災、あるいはその前の阪神・淡路大震災で一番問題になりましたのは、教育委員会から来ましたということで、簡単な預り証を発行して、預かって、そのまま持って帰って、盗難に遭ったという件数が非常に多かったわけですね。だから、いざというときには、どうしても行政の役割というのは非常に大きいですが、彼らが基地になっていただいて、実際には博物館の人間、学芸員を初めとして博物館の人間が活動をするということが非常に大事かと思うんですね。活動するときに資料をどうしても運ぶわけですから、ふだんから運ぶためのいろんな資材が必要なんですね。それを県博協等で相談いただいて、各博物館がいざというときの資材、梱包資材等を含めた準備をしておく、各館があるいは各施設がそれを準備しておくという体制をつくっていくということが大事なのではないのかなというふうに思います。当然、そういうことはお考えかと思えますけれども、一言、意見として言わせていただきました。

○会長：ありがとうございます。

特によろしいですか。

では、ほかに何でも結構です。

○委員：すみません、何回も言わせてもらって。

第3期のリニューアルについて、今、説明がありまして、グランドオープンも近いということでお話しをいただいたんですけども、それには当事者参画のモニター隊の当事者さんたちの会議がもう一つあるということをお伝えしておきたいなと思って、今、マイクをとらせてもらったんです。あっ、きれいになったね、あっ、見やすくなったねという見方ではなくて、例えば車椅子に乗っていらっしゃる方が展示を見たいんだけど、近くまで行けるけれども、フットレストでそこまで行けなくて、見えなとかいうことをどうしたものかということをお施工業者さんの技術も駆使していただいて、当事者さんもこういうふうな角度なら見るとかというような角度、これならどうだ、どうだということで、角度もすごく細かく調整をしたりして、そういう展示物が設置されているとか、それとか養護学校の先生とかにも参画していただいているので、こぞって来た場合に、いろんな文献を博物館的に見るというレベルではない、もちろん知的障害があつたり、重度の身体障害があるので、それはできないんですけども、風だとか、においだとか、さわるだとかいうことは、十分楽しめる子たちですし、その辺はどうでしょうみたいな意見をいただいて、なるほどということで、じゃ、におうということをお各所につくってみましょうということで、例えばヨシのにおいをおかぐブースであるとか、郷土愛を育むための鮎ずしのにおいとか、そういうにおうものを駆使してつくってくだ

さったりとか、それとか私が担当している、聞こえない方々、特に手話を母語とされる方々は、文章がなかなか読み切れないという困難を抱えています。

外国籍の方ももちろんそういうことがありますので、それは養護学校の先生も総ルビでお願いしますということで、知的障害の方も平仮名なら読めるけども、漢字はちょっと読めないということもありますでしょうし、ルビは全て振られています。そして、例えば使用という、「使う」「用いる」というふうに2つ重なるような日本語があると思うんですけども、そういう言葉が外国籍の方がとても苦手というのは、私も目からうろこだったんですけども、そういう場合は、「使用」ではなくて、「使っています」というふうに1つにさせていただいたらわかりますみたいなことを言われたので、保護者対応のお手紙を書くときに、僕たち、それを気をつけていますという養護学校の先生のご意見をいただいたりして、そういう説明文一つ一つも、そういうモニターの方々の意見を入れていただいて、リニューアルされているということも見ていただきたいですし、視覚障害の方は、やっぱりこういう館に来て、なかなか情報がとれない中、さわれるものがあつたらとてもうれしいということを言われて、琵琶湖の底はどんなざらつきがあるとか、ここはきれいな砂だけど、ここはざらざらだとか、深さはどんなだとかという、さわれるようなブースもあつたり、そういうのは、ああ、なるほどなではなくて、これはもちろん見える方にも楽しめるかもしれませんが、視覚障害の方の意見でこれがつくられたんだなというようなものも感じながら、リニューアルオープンの内覧会とかに足を運んでいただいたときに、そういう一つ一つのことが当事者さんの意見で形になっていったのかなというのを見ていただけたらうれしいなと思っております。

トイレに関しても、養護学校の先生は、やっぱり赤ちゃんのおむつ替えのベッドはあるんだけど、養護学校に在籍している、背丈も大きくなっている子どものおむつを替えるブースがないのでということで、別館にそういうブースもきちんとつくっていただき、オストメイトさんのパウチを洗う浴槽なんか一番ベストなものを選定していただいて、両者が1階にも2階にも作ってくれなんて言われないうんですね。どんなに遠くて不便なところでも十分なものがあつたら、そこまで僕たち歩きますので、1カ所でいいので作ってほしいということもおっしゃって、それもすごい担当さんとか、館長とか、いろいろな方々が本庁に出向いて、予算どりを駆使してくださったんだと思うんですけども、何とかかかって、そういうところも見ていただきたいですし、オストメイトさんが片麻痺があるので、パウチをとって洗って、またつけるというのがとても大変ということで、奥様がいつも一緒にいらっしゃる。障害者用のトイレに入って2人で出てくると、すごくげんな顔でいつもじろじろ見られるのがとても嫌だという意見も言ってい

ただいて、ここの障害者用のトイレには、「介助中」という札をつけてくださっています。なので、それをぺらっとめくるだけで、あっ、介助してはったんかというふうにならなくてもらえるというような、本当に細かな当事者さんじゃないとわからない痛みだとか、気づきだとかをいろいろ教えてもらいながらリニューアルをしていったということをお伝えしたくて、たびたび申しわけございませんが、マイクをとらせていただきました。失礼いたします。

○会長：ぜひそうやってご苦労して、細かな配慮をされているということをお広く伝えていただいて、たくさんの方に来館していただけるようになればいいというふうに思います。ほかにいかがでしょうか。

○委員：今まで、小学校、中学校の若い年代層、また専門分野のお話が多く出ていますけど、私的には全くの素人で、後期高齢の域に達している中で、滋賀に生まれてよかったな、滋賀で育ってよかったなという、その辺は情報発信なり、展示物であったりとか、ほかのミュージアムとの連携で、滋賀県の琵琶湖博物館は、このような取り次ぎをやっているし、それを見て、感じて、参加して、ああ、やっぱりよかったと言われるような施設、発信も含めてですけど、そうやってほしいなと。昨年の展示からもろもろ講座とかある中で、里山体験とか、琵琶湖を歩こう！とか、鮎ずしとか、田んぼと琵琶湖はつながっているとか、自然観察であるとか、農業とか、先ほど韓国との合同セミナーのお話もありましたし、琵琶湖の水質保全と環境とか、今ある琵琶湖というのをベースに全て研究発表がなされているけど、これが今後永続していくにはどうしたらいいのかな、住民の一人としては何をすべきかなという気持ちもありながら、残る人生をよかったと思えるような施設の役割になってほしいなと思います。研究もピンポイントで、その研究と私の生活はどうつながるのかなというところを、何かかみ砕いて、わかるような博物館であってほしいし、田んぼについては、魚のゆりかご水田ということの世界農業遺産の関係でされていますけど、水田とゆりかごって、どういうことって、赤ちゃんが田んぼに行くのというようなレベルの感想しかなかったんですけども、やっぱり生活と水、琵琶湖はつながっているし、その辺も私も知らなかったし、その辺の学びと生活と老後の安心した情報発信の琵琶湖博物館であってほしいなと、そんなことを思いながら、今日は伺っておりました。

○会長：ありがとうございます。

○委員：第3期のほうで資料をいただいている一番最後のB展示室ですが、ほとんど私の個人的な興味で申しわけないんですが、B展示室の真ん中あたりの、ハナバイとかイモクラブ、それから虫送り、これは大体どこの地区のでしょうか。滋賀県内、あっちこっ

ちによく似たものがあると思うんですが、何か代表的なものをされたんですか。

○事務局：どこのものとおっしゃいますのは、モデルはどこか、展示物はどこのものかというご質問ですか。

○委員：そうです。

○事務局：ハナバイは甲賀市大鳥神社です。つくっていただいたのは、甲賀市甲賀町神区です。虫送りは甲賀市信楽町多羅尾の虫送り松明です。イモクラベはご承知のとおり、日野町中山です。

○委員：それともう一つ、B展示室の右下のほうの「湖をつかう」になるのかな、「湖からみる」になるのかな。これは明治の大洪水の水系の地図を床に展示していただけたんですね。あちこちに碑が残っておりまして、水がこの辺まで来たというので、そういう碑を訪ねたこともあるんですけど、やっぱり自分の感覚で、全体がぴんと見えないんですね。なので、こういう地図を床に置いていただいて、どこら辺まで来たというのが見えるのはうれしいなと思っています。ただ、これは明治の最大のものだけじゃなくて、もう少し何回か違うものもあったと思うので、できればそういうものもわかるようにしていただけたらありがたいなと思います。これはお礼を申し上げます。ありがとうございます。

○会長：ありがとうございます。よろしいでしょうか。

○委員：私、大体いつもしゃべり過ぎるので、評議員が何か言うと、スタッフの皆さんが対応しなきゃいけなくなっちゃうから、必要がないときはなるべく黙って、皆さんに伸びやかに研究していただこうと思っています。

梁山泊のことがいっぱい話題になって、私も変な子ども扱いされて、ずっと育ちました。その延長線上で今、科学者になっています。子どもころに本物の顕微鏡とか、とても親が買ってくれないようなものには確かに憧れていて、使わせてもらえる制度が当時あったら、僕はうれしかっただろうなと思いながら聞いていました。

先ほどの委員さんからの心配も、実はすごくよくわかるんです。僕の心の中に、賛成派、反対派が今入り混じってまして、今、私、福井県で年縞博物館というのをやっているんですけども、福井県の高校生、中学生が自由研究をやりたいと言ってやって来る。表現はよくないんですけど、言葉を選んでいる時間がないので、まねごとをします。すごく褒められて、すごくいい気分になります。全国大会に行ったり、国際学会でポスターを出したりして、褒められます。すごく大変なことを成し遂げたような気持ちになる。プロの目から見ると、やっぱりそれはちゃんちゃらおかしいまねごとなんです。それが楽しかった記憶はすごく大事なんだけど、その先にもっと圧倒的にハイレベル

で、そしてやっていたら実はもっと圧倒的に楽しい本物の世界があるということと同時に意識して、いつの日かそこに手が届くためには、先ほどもおっしゃったけれども、今はとりあえず受験勉強をやれというのも実はすごく大事なことです。導入の楽しさを味わわせることと、シビアな本物の背中を見せることの両方をぜひやっていただきたい。私、毎回同じことをばかの一つ覚えで言い続けているんですけど、ぜひ皆さん、ご自身が没頭できる研究の一流のプロであり続けてください。そのためには、評議員の提案を無視する勇気も持ち合わせて、どうかご自分の時間を大切にしていきたいと思えます。

○委員：さっき、ゆりかご、田んぼとおっしゃいましたよね。あれはすごく大事なことで、大塚さんの梁山泊ですけども、子どもたちが単細胞の名前どうのこうのだけに終わってしまうんじゃなくて、あれが田んぼ、琵琶湖の関係の中でどんな意味があるのかということ、ぜひ教えてほしいなと思います。自然科学というのは、それぞれの生物の名前を知るだけでは、こんなもの、あほでもできるわけで、その関係の中で生きているということ、ぜひもっと教えてほしいなと思う。田んぼがゆりかごというのは、ニゴロブナは生まれた田んぼへ帰ってきますし、ホンモロコも生まれたところへ帰りますよね。そういうことが今どんどんわかってきていると、保全のこともありますし、琵琶湖博物館もその辺のところをもう少し大きい声で言われたらなと思うんですけども、これは僕のお願いですね。もったいないなと思います。いい研究の結果わかっているのに、もっと使ってほしいということがありますし、それと説明ですよ。田んぼがゆりかごというのは、よく理解がいくように、一般に浸透していない。すごく大事なんですよ。水田を守るということは、魚を守ることでもありますし、ニゴロブナなんかなくなっている、なくなっていると言っているけれども、それは産むところを潰しているんだから、どうしようもないわけで、それを復活させる道はあるわけですよ。これも自然科学を用いてできるので、そういう関連性を梁山泊のやくぎで教えてほしいなと私は思うんですよ。単に名前を覚えさすだけ、これはだめです。子どもが列車のヘッドマークを覚えるのと一緒で、あれはちょっと知識欲のある子なら誰でもやるので、そうじゃなくて、関連性の中で物事があるということ、ぜひこれは小さいときから植えつけてほしいなと思います。子どもがやっぱり関心を持ってまとめるというのは、これ大人の考えなんですよ。そうじゃなくて、関心を持った、子どもの関心を潰さないということが一番大事ななと思いますね。大人になってもそれをもち続けていられるように。そのためには、やっぱり受験勉強も必要なんですよ。というのが私の考えです。

○会長：ありがとうございます。

時間が来ましたので、そろそろ終わりにしたいと思います。

なお、資料4が最後についていましたけども、前回の委員の皆さんからの質問とか意見に対するその後の対応が載っておりますので、確認をしておいていただきたいと思います。

それでは、長時間にわたり貴重なご意見を、皆様、ありがとうございました。事務局に進行をお返しいたします。

#### 4 閉会

○司会（副館長）：どうもありがとうございました。

会長並びに委員の皆様方、長時間にわたりまして熱心にご意見、ご討議のほうをいただきまして、ありがとうございます。

本日いただきましたご意見につきましては、私どもまた検討した上で、今後の博物館の運営に生かしてまいりたいというふうに思っておりますので、どうぞまた引き続きよろしく願いいたします。

なお、次回の会議でございますけど、来年、令和2年2月ごろを予定しております。また後日、日程調整の連絡はさせていただきますので、よろしく願いいたします。

この後、現在開催しております企画展示、「海を忘れたサケ-ピワマスの謎に迫る-」、これをご案内をさせていただきますので、お時間のある委員の皆さんは、ぜひご参加していただきますようによろしく願いします。

なお、帰りのバスでございますが、15時59分です。これを逃すと17時半までありません。さっきバスのお話が出ていましたけど、不便なところにありますので、気をつけて帰っていただきますように。

本日はどうもありがとうございました。

**[15時10分 閉会]**